

子どもの育ちと学びの連続性に着目した地域における表現活動

—— フランスにおけるアニメーションの事例から ——

大庭 三枝⁽¹⁾

Local activities inspiring children to express themselves for enhancing the continuous development and learning

The use of “animation” in the libraries of Tours, France

OBA Mie⁽¹⁾

We should provide children with the conditions in which they can safely play and enjoy inquiring into the world around them. Children cannot express themselves with confidence without feeling protected. This also guarantees the interactive relationship between children's growth and learning. For enhancing their continuous development and learning, “Animation” is really important as an effective device, which cultivates children's sensibility and nurtures their imagination. This is being proved by the attempt of the libraries in Tours, France. To stimulate children's sense, they try to make the most of animation including storytelling and art activities according to age, to the stages of children's development.

Keywords : children's continuous development and learning, animation, libraries in France, activities to inspire children's expression

I. はじめに

近年、日本の教育現場においては「連携」という言葉を用いた模索が各地で取り組まれている。「保幼小連携」、「小中連携」、「中高連携」、「高大連携」など、教育制度的に区分された枠組み同士の円滑な接続が課題となっている。「小中連携」は小中一貫校に、「中高連携」は中高一貫校として具体化を見せている地域もあり、現在では6・3・3制の再編という議論に進展している。

本学の位置する福山市においても、中学校区における「小中連携」に力点を置いて、子どもの育ちと学びの連続性を支えようとしている。そして、福山市・福山市立大学連携事業として2012年度より「福山市の保幼小連携に関する研究」が立ち上がった。「児童の生きる力をはぐくむことを目指し」（文部科学省、2008b）で、子どもたちの育ちと学びを就学前から小

学校にいかにつなげ伸ばすか、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」（文部科学省、2008a；厚生労働省、2008）である幼児期の教育に携わる保育士・幼稚園教諭が小学校教諭とともに研鑽を積んでいる。

小学校学習指導要領では、「創意工夫を活かした特色ある教育活動を展開する中で、（中略）課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養」（文科省、2008b）うことが目指され、そのために家庭や地域と連携しながら地域の特性や社会資源を活用した豊かな体験が重視されている。

このように日本でも指摘される、子どもたちの育ちや学びの連続性に着目した地域における表現活動について、多文化を包含する国フランスでは、生涯教育および社会教育の視点から、アニメーションという形態を

⁽¹⁾ 福山市立大学教育学部児童教育学科

伴って多様に構成されてきた。本稿では、2014年1月に展開されたフランス・Tours（トゥール）市図書館におけるアニメーションの事例を取り上げ、豊かな体験をどのように創出しようとしているのか、またそこから子どもたちは何を学びとっているのか、分析していきたい。

II. アニメーションとは

アニメーション（animation（仏語）、animación（スペイン語））とは、大人も子どもも一緒になって楽しい活動を創出し、多様な体験の中から感性を磨き豊かに想像力を膨らませて、心身を活性化させながら仲間とともに楽しむことをいう。ヨーロッパでは、学校の内外で取り組まれ、学校教育（éducation（仏）、educación（スペイン））とは違った原理で専門的に援助する指導者を animateur（仏）、animador（スペイン）と呼び、養成された指導者が各地でアニメーションを展開している。こうした社会体制は、アニメ（魂）を生き生きワクワクさせながら自由闊達な精神と身体の躍動を作り出していくことが、人間発達と社会の発展に関して重要であるとする「社会文化アニメーション」の考え方に立脚している。生活・あそび体験から学び成長していく子どもたちにとって、総合的な育ちと学びの連続性を考えた時、「アニメーション」という概念は極めて重要な意味を持っている。

日本では「子どもの権利条約」第31条に関連して、子どもの文化権とアニメーションが検討されている（佐藤・増山，1995）。子どもの健やかな成長・発達のためには①生存権・生活権②教育権・学習権③子どもの文化権が保障されるべきであり、どれも欠けてはならない福祉・教育・文化という構成要素によって支えられている。「子どもの健やかな成長・発達を促すく子育て」の概念は、第一に、子どもの命・身体・心をやさしく守り育てるということ、すなわち愛護・保護しつつ育成すること（プロテクション）。第二に、子どもの技術や学力、技能や能力をていねいに引き出し育てていくということ（エデュケーション）。そして第三に、子どもたち一人ひとりがありのまま、その精神を自由にのびやかに輝かせながら、生き生きとした生活を築きあげていく過程をいっしょに楽しんでいくこと（アニメーション）。「養育」と「教育」と「遊育」の三つの内容によって成り立っている」と増山（2000）

は指摘している。同時に、本来統合的であるべきこの三分野は、行政的には「福祉」と「教育」の深刻な分断に加え、「文化」の視点が貧弱である現状が否めない。

児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）第31条（休息・余暇・遊び、文化的・芸術的生活への参加）については、「締結国は、こどもが、休息しかつ余暇をもつ権利、その年齢にふさわしい遊びおよびレクリエーション的活動を行う権利、ならびに文化的な生活および芸術に自由に参加する権利を認める」と明記されている（増山・齋藤，2012）。子どもたちの成長・発達のためには、休息・余暇の権利、遊び・レクリエーションの権利、文化的な生活・芸術への参加の権利が保障されなくてはならず、そのためには文化的、芸術的な環境と機会が平等に与えられなければならないのである（OMEP日本委員会，2012）。ところが、2011年の東日本大震災と津波、原発事故は、それまで当たり前前に展開されてきた、外で思い切り遊ぶ、自然を体感する、地域の伝統行事にふれる、といった子どもたちの成長に欠かせない生活体験の場を日常から奪ってしまった。日常生活の中で福祉・教育・文化の権利それぞれが豊かに保障されることの必要性和、そのどれが欠けても子どもたちの未来に大きな影響を残す危険性を浮き彫りにしたのである。

特に文化の領域は、人間の成長・発達と人間生活にとって不可欠な「精神の豊かさ」を保障する領域である。文化権は生存と生活の権利を豊かにするとともに教育と学習の権利を確かなものにする土台として、大人にも子どもにも重要な基本的権利として考えられ、それを生活の中でどのように保障していくかが課題といえる。

III フランス・Tours（トゥール）市立図書館におけるアニメーション

首都パリからTGV（フランスの高速新幹線）で南西に1時間、Indre-et-Loire（アンドル・エ・ロワール）県の県庁所在地 Tours（トゥール）市は、郊外圏を合わせて人口約14万人、宗教的・歴史的建造物と町並みが残る旧市街地と、2013年に開通したばかりの最新市電交通網が整備された現代的な部分が融合した街である。市内にはローマ時代からの遺跡が残り、4世紀聖マルタンの遺体がこの地に葬られたことで中世より巡

礼の地として、またロワール川中流域の拠点として発展した。現在も「フランスの庭園」と呼ばれる風光明媚な Touraine（トゥレーヌ）地方の政治・経済・文化・教育の中心都市である。

Tours市には公立図書館が7館あり、中心部に位置し市内最大の蔵書を誇る中央図書館は、第二次世界大戦中ドイツ軍による空襲で大破したロワール川沿いの地域に、戦後すぐ建築された。戦時中に破壊されたのは建物だけでなく、文化・社会教育復興のシンボルとしてこの図書館が果たした役割は大きかったと思われる。築65年を超え近年は建物の老朽化が激しく、館内の電子化および施設設備の増改築工事のため長い間休館していたが、2013年12月に再開館し中心的機能を取り戻している。2014年1月からは市内各館が連携しながら、毎月テーマを決め、館内行事およびアニメーション（芸術活動、読み語り、コンサート、映画上映、展示など）を展開している。

各館子ども対象に読み語りとアトリエを使ったアニメーションを水曜日や土曜日に行っており、今回の調査で訪れることのできたアニメーションを読み語り活動と芸術活動に分類し考察していくことにする。

（1）子ども対象読み語り活動

① Médiathèque François Mitterrand（フランソワ・ミッテラン図書館）

1月8日（水）10時30分～11時30分（対象4歳まで）

Médiathèque François Mitterrand（フランソワ・ミッテラン図書館）は、2007年12月に Tours 市北部に開館した市内で最も新しい図書館であり、書籍の他映像・音楽関係が充実し最新の設備を有している。



（図1）集中して聞く子どもたち

この日は幼児向けの読み語りであったが、対象年齢の子どもたちだけでなくその兄弟である小学生まで、多様な年齢の子どもたちが集まった。すり鉢状になった部屋にマットを敷き、積み木のような丸や三角・四角の大型クッション、椅子が置かれ、子どもたちは思い思いの場所で、リラックスした格好でお話を聞いていた。

親子で来ている場合が多かったが、中には Assistante maternelle（研修を受けた保育補助者、県が認可：自宅保育や小規模な家庭的保育を担う）と一緒に来ている子どもたちもあり、文化へのアクセスが乳幼児期から保障されているという印象を受けた。



（図2）読み語りの様子、お母さんや Assistante maternelle（左奥、二人の子をひざに乗せて座っている女性）と一緒に

この日の読み語りには、「冬と暖かくしてくれるもの（チュッ、なでなで、一緒に）」をテーマに8冊が選書されていた。幼児期に目覚ましい発達を遂げる身体感覚を意識し、読み語りに加えて、五感を刺激するよう歌と音楽（聴覚）や触れる小道具（触覚・視覚）、季節の伝統菓子（味覚・嗅覚）を織り交ぜながら、1時間を超える読み語りはあっという間に過ぎていった。

子どもが大好きな温かい身体接触（頬にキス、抱きしめる、なでる）が出てくる絵本を見ながら、同時に両親や保育者に抱きしめられ頬にキスをしてもらうことで、子どもたちは安心した表情で読み語りの時間をそれぞれの方法で楽しんでいた。

また、フランスにはカトリックの公現節（1月6日）にちなんで Garette des rois（ギャレット・デ・ロワ）を切り分けて食べる風習がある。小さな人形を中に入れて焼いた円形の焼き菓子を皆で切り分け、人形の入っていたピースに当たった人は王冠を受け取り一



(図3) 絵本に触れさせる様子(左奥の机の上に Garette des roisと王冠が用意されている。)

年の幸福がもたらされる、という季節の伝統行事で、おおむね1月いっぱい家庭・学校など様々なところで行われる。調査日は1月8日、子どもたちに季節の伝統行事と伝統菓子を紹介するために、Garette (ギャレット) の出てくる絵本 (‘J’aime la galette’) と歌、そして Garette des rois 実物を用意し、五感で伝統文化を体験する機会を提供していた。読み語り活動の最後に切り分け、参加者皆で美味しくいただき、一年の幸運を祈った。人形が入っていたので王冠をもらった子どもたちは喜色満面で、王冠をかぶったまま帰っていった。

若い読み語り担当者はこの日が初めての読み語りということであったが、テーマに即し、幼児期の発達を考慮した進め方を工夫していた。まず音楽の取扱いであるが、生の歌声だけでなく CD を用いて伴奏楽器の演奏音にも触れさせていた。保育現場でよく用いられ誰でも知っている童謡の時、参加した大人たちは皆一緒に歌っていた。大人たちの楽しそうな雰囲気を感じ取った子どもたちは、歌を歌えなくても体を動かしたりリズムにのって踊ったり、手をたたいたりしながら、



(図4) 歌にのってダンス(右の男児は手を叩きながら踊っている)

歌の間体全体で楽しさを表現していた。

次に、「固い」「ちくちくする」「冷たい」「やわらかい」「ふわふわする」といった皮膚感覚が出てくる絵本の時には、実際に子どもたちが体感できるように鍋やほうき、タオルや紙ナプキンなど実物を用意して子どもたちの主体的な体験活動を創出しようとしていた。じっとしている子どもに対しては、仕掛け絵本の時語り手が子どもに近寄って実際にめくらせたり引っ張らせたりして、お話を聞くと同時に身体活動を伴ってその言葉の意味が子どもたちの理解に届くような配慮が感じられた。

低年齢の子どもたちは読み語りの間じっとしていない。しかし、親も語り手もすぐに子どもを連れ戻さず、危険がない限りは様子を見ながら再びお話に戻ってくるのを待っている。子どもは自分の興味の赴くまま動いたり触ろうとするが、会場全体が落ち着いた雰囲気なので自分なりに納得すると再び座ってじっと話を聞いていた。語り手である担当者は「この年齢の子どもたちにじっと座って聞かせるということは、子どもの生理を考えると難しい。無理やり聞かせるというよりも自分から聞こうとする姿勢を尊重している。一時動くかもしれないが、落ち着けばまた戻ってくるので、指示や禁止・否定の言葉を用いないようにして待つようにしている。」と語っていた。



(図5) リラックスして聞く様子

おしゃぶりをくわえた子どもの多い低年齢児用の読み語りであったが、人間形成の基礎を培う身体感覚の発達に加えて心の安定と安心感を保障しようとしている。さらに季節の伝統文化体験をも織り込み、様々な要素が盛り込まれた楽しい「アニメーション」であった。

② Bibliothèque des Rives du Cher

(リヴ デュ シェール図書館)

1月11日(土)10時30分～11時30分(3～6歳対象)

この図書館は、Tours 市南部 Cher (シェール) 河
畔の庶民的な住宅街に位置している。土曜日とあつ
て、親子連れが集まり対象年齢の子どもたちだけでな
く、その兄弟である小学生まで多様な年齢の子どもた
ちが、お父さんやお母さんにもたれて安心して話を
聞いている。

フランソワ・ミッテラン図書館の読み語りと比べ、
年齢が少し上であるので、ここでは小道具を用いず、
絵本の絵とストーリーと語り、語り手からの問いかけ
だけで進んでいった。テーマは主に「冬」、7冊の
うち冬がテーマのもの5冊(‘La Licorne’ 他)、色
彩と魚の表情で様々な「感情」を理解するもの1冊
(‘Aujourd’hui je suis…’), 親子の問答から子
どもの想像力に働きかけとんちのきいた1冊(‘Le
crocolion’)が読まれた。



(図6) 読み読みの様子

これらを1時間以上続けて読んでも、子どもたちは
集中力が切れることなく食い入るようにお話に聞き入
り、絵本に見入っていた。間にさしはさむ担当者の問
いかけは、子どもたちにわかりやすく絵本の世界に入
りやすいものであった。子どもたちは時に真剣に、時
に笑い声をあげながら、お父さんの膝の上で、お母さ
んに寄りかかりながら、読み手との語らいをそれぞれの
方法でその子らしく楽しんでいった。子どもたちが心
地よく読み語りに参加し、絵本から受ける印象を自由
に表現できる環境で、子どもたちはのびのびと想像と
言語表現の翼を広げていった。

選書の中には、日本の絵本の仏語訳されたもの

(‘Voilà le facteur !’, 原著: 間瀬なおたか『ゆうび
んでーす!』)もあり、日本発の絵本・児童文化がフ
ランスの図書館に浸透していることがうかがえた。



(図7) お母さんと触れ合いながら聞く様子

③ Bibliothèque Centrale (中央図書館)

1月11日(土)15時30分～16時30分

ポップアート絵本による読み語り(対象3歳から)

この時期の中央図書館内全体のアニメーションは、
「ポップアップエキスポ(ポップアップアートの展
示)」であった。有名なポップアップアート作家
Phillippe UGのオリジナル作品を館内いたるところ
に展示してあった。



(図8) 宇宙をテーマにした作品

中央図書館の読み読みの部屋は階段に座る形で、ど
こに座っても提示される絵本が見えやすい構造となっ
ている。ポップアート絵本を扱う場合、ページをめく
り提示するタイミングや表現と、子どもの心の動きを
尊重した過不足ない語りに細心の注意が払われている
ように感じた。子どもが絵本そのものから感じとって



(図9) 人間の体の動きをテーマにした作品

いる瞬間を大切にし静かに待つ、「説明しすぎない」語りなのである。

階段の部屋でお父さんやお母さんのひざの上でポップアート絵本の読み語りを静かに聞いていた子どもたちも、開くと立体になる飛び出す絵本の仕組みに興味津々で、思わず近寄って確かめていた。担当者も子どもたちの好奇心を尊重した対応をとり、二次元の平面的な紙が三次元に立体化する不思議を、子どもたちは触って、体験的に理解しようとしていた。



(図10) 階段の部屋でお父さん・お母さんの膝の上で聞く様子

担当者は、子ども自身が仕掛け絵本から感じ取ったことを自分なりに表現したり、想像したり、再構成したりできるよう援助的な語りかけをしている。そして子どもそれぞれの感受性が尊重され、決して先入観やステレオタイプの見方を与えない。子どもたちは自分の感じ方を存分に楽しめる「アニメーション」に、嬉しそうに参加していた。

選書の中には、日本を代表する造形作家・駒形克巳

の『Little tree』があった。担当者はその理由を、自然の移り変わりを繊細に表現しており樹木の変化に感情移入できる芸術作品として極めて質の高いものだからだと絶賛していた。ここでも日本人の感性と表現は高く評価されていることがわかる。



(図11) 子どもの動きに合わせて反応する語り手の豊かな表情



(図12) 実際に触って確かめようと興味津々で集まる子どもたち

(2) 子ども対象芸術活動

① 樹形図作り

Médiathèque François Mitterrand

(フランソワ・ミッテラン図書館)

1月8日(水)14時～16時(7～12歳対象)

この館における1月のテーマは「私と他の人たち」である。このアニメーションは館内にある芸術アトリエで行われた。自分の存在と他者(家族)との関係性の意識が子どもたちの中に高まるよう、指導員が丁寧に提示する本を選び、造形活動を通じて子どもたちは心に芽生えたもの、感じたものを形にしていた。

指導員はまず樹形図について、自分のルーツをさか

のぼる家系図であることを、中世から現代まで様々な樹形図と紋章について書かれた専門書を用いて子どもたちに説明した。その後、この日用いる様々な表現技法について解説した。

子どもたちは、まず家系図の下書きを行った。その過程で自分は様々な人々と関係を持っていることを自然と学ぶことができる。



(図13) 左:樹形図の専門書を用いての説明, 右:自分を起点とした家系図の下書き

次に樹の枝を創っていくのは、ストローで絵具水を吹き飛ばしながら広げていく作業である。なかなか思うように広がらず最初は苦労していたが、慣れてくると思い通りの枝ぶりですべての子どもの楽しい樹形図をどの子も作ることができた。スポンジで葉を描き(色を置き)、中央には自分がこの日創造したオリジナルのエンブレムを描いている。



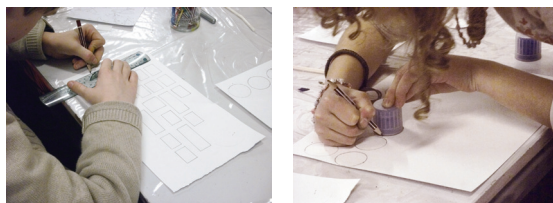
(図14) ストローで吹き飛ばして枝を描く

子どもたちは、自分からさかのぼる人物を枝に置いていくための紙を、定規を使って四角に切ったり、キャップを使って丸く切ったりしていた。それを樹形図に貼っていけば、自分のルーツをさかのぼるオリジナル樹形図の出来上がりである。「こう作りたい」とか「この道具を使おう」など自分の行動を主体的に決定しているので、自己のイメージの樹形図に近づけるため、子どもたちは集中して粛々と作業を進めていた。

図17の男児は父親がフランス人、母親がベトナム人



(図15) スポンジで葉の色を付ける



(図16) 人物を書き込むプレート作り(左:定規を使用して四角形, 右:キャップを利用して丸)

なので、エンブレムとしてフランス国旗の色を用い、中央にベトナム国旗にあるものと同じ黄色い星を描いて、両親の母国を融合したものを描いた。彼を迎えに来た母親は作品を見るなり真っ先にこのエンブレムの意味を理解し、「お父さんの国フランスと私の国ベトナムが両方入っている！」と大喜びしていた。また、フランスに住んでいるので、父方につながる枝は人物が多く置かれているが、母方につながる枝は祖父母や親族も遠いため、あまり置かれていない、とこの母親は少し寂しそうに語っていた。フランスの祖父母に可愛がられているというこの男児は、母親の心情を理解した上で、母の国の星を中央に輝かせ彼女を励ましたかったのだと思う。母親にこの子の気持ちが伝わり、母親は本当に嬉しそうであった上、この男児も誇らしげであった。



(図17) 左:父がフランス人、母がベトナム人の男児が作った樹形図, 右:エンブレムの拡大図, 中央の星はベトナム国旗の星と同じ

②ポップアートでメッセージカード作り

Médiathèque François Mitterrand

(フランソワ・ミッテラン図書館)

1月11日(土)11時~12時(終了間際に到着)

(4~6歳対象)

Bibliothèque des Rives du Cher (リヴ デュ シェール図書館)のアニメーションと掛け持ち見学したこの日は、カード作りの作業終了に間に合わず子どもたちの活動の様子を見ることはできなかったが、出来上がったカードを持って帰ろうとする子どもたちに出会うことができた。

日頃の感謝を込めて、おじいちゃん、おばあちゃんに「いつもありがとう」の気持ちで作った飛び出すカードを、子どもたちは得意げに見せてくれた。子どもたちの心には、プレゼントした時の祖父母の喜ぶ顔が想像できているようであった。おそらく、作業中にも思い浮かべながら手を動かしていたに違いない。この年齢にとっては難しい作業(はさみをうい曲線に沿って丁寧に切る、字を書くなど)も含まれていたらしいが、各人各様の感性が光る色鮮やかで素敵なカードが出来上がっていた。



(図18) 左:「おじいちゃんへ」と一生懸命書いたカード、
右:開いたところ(渦巻きが立体的に出てくる)

指導員は、子どもたちに自分の存在を確認できる機会を提供することを心掛けた、と語っていた。命がながって自分がいるということに気づき、感謝の気持ちを込めて、可愛がってくれる祖父母に手作りカードを作って手渡すところまでを、一連のアニメーションと考えている。

IV アニメーションがもたらすもの

Médiathèque François Mitterrand (フランソワ・ミッテラン図書館)のアトリエには、壁面にぐるりと美術史(人類の所産の歴史)の年表がはりめぐらされており、自分の存在が歴史という大きな流れの中にあることを感じさせている。

樹形図作りのアニメーションのために用意された本は

10冊以上あり、樹形図に関するもの、技法に関するもの、自己存在に関わるもの(子どもの哲学絵本)など、子ども用から本格的な専門書まで多岐にわたっており、子どもはいつでも作業の合間に見ることができた。心に浮かんだイメージを実際の形にしていく2時間の作業に、7歳から12歳の子どもたちは真剣に取り組んでいた。その姿は、造形活動というよりも自分の生をさかのぼることによって自己存在を認識していく過程そのものであった。言い換えるとすれば、鉛筆やペンで描いたり、ストローで吹いたり、スポンジでたたいたり、定規やキャップを使ったり、はさみで切ったり、のりで貼ったり、実に多様な身体活動を通じて子どもたちが自己を見つけていく哲学の講座のように感じた。

中世の樹形図を例として見せたことから、指導員はBGMにバロック音楽をかけている。指導するアニメーションに対する深い理解が子どもたちの興味と集中をもたらししていた。子どもたちと一緒に活動には大人としての深い教養が必要不可欠であること、子どもでも本物は感じ取れること、いわゆる「子どもだまし」では通用しないことを目の当たりにした。子どもたちはこのように五感を駆使し、手指操作などあらゆる細かい動作をも駆使して、世界で一つだけの樹形図をそれぞれ自分の手で作り上げた。安心して行動できる環境で身体活動を通じた直接体験こそ、子どもが主体的に学びとっていく営みと思えた。

日本では出自を遡るこうした活動は難しいかもしれない。が、さまざまなルーツを持つ子どもたちが自分に誇りを持って自分と他者を理解していく一助となるこのアニメーションは、子どもの時期に育つもの、心に残せるものは何か、残っているものは何か、を大人に考えさせるものでもあった。と同時に、児童期におけるアイデンティティの形成という点では重要な意味を持っていると考えられる。

今回調査したアニメーションは造形活動であれ、読み語りであれ、子どもの身体感覚を駆使した体験を重視する姿勢と子どもの感性を刺激する工夫が徹底されていた。故に、子どもたちは驚くほどの集中力を発揮し、体も心も動かしながら体験活動に没頭していた。そこから体得したものは、子どもの中で再構成され自分自身の表現方法となって表れてくる。子どもの何に働きかけようとしているのか、そのためにどのような教材・

教具・材料を用意すべきか、子どもの発達に応じた働きかけと受容の質がアニメーションの質を左右するといえる。どれだけ子どもたちがワクワクしながら夢中になって活動に参加したか、そんな活動を創出することがアニメーションには求められている。

そこで、Tours 市内7図書館は、定期的なミーティングを開き子どもたちの成長発達にとって、絵本を中心として図書館が貢献できることを議論し、連携してアニメーションの質向上のために努力している。中央図書館には児童書部門責任者がおり、各館との連絡調整と選書会議の運営、各館のアニメーション計画への指導を行い、各館の提供するアニメーションの質保障に注意を払っている。提供する側の丁寧な姿勢と個別の表現を受容する寛容さがあるからこそ、どの子も心躍らせて活動するアニメーションを創出できるのであろう。

V おわりに

今回フランスにおけるアニメーションの事例を分析したところ、子どもたちが安心して体験活動を行いそこから感じたことを安心して表現できる環境整備としての意味合いが強かった。図書館は本に関することだけでなく、本を有効活用しながら子どもたちの感覚を刺激し、感受性と多様な表現力を育てていく社会教育機関として多義にわたって機能していた。

フランスの図書館には、必ずと言ってよいほどアトリエが併設されている。ヨーロッパで重視される「生き生きと躍動する魂」を育てるためのアニメーションの考え方は、今後の日本の教育現場にも極めて重要な示唆を与えるものである。特に幼児期の「生き生きと躍動する魂」を大切に育て、発達の連続性を尊重しながら小学校生活へと接続させていく保幼小連携には欠かせない視点といえる。幼児期の生活体験が、子どもの思考力・判断力・表現力としてどのように育っていくのか、フランスでは社会教育であるアニメーションによって文化へのアクセスを保障し、これらの能力を育もうとしていることがわかった。

子どもたちの生きる力を育てるためには、保育・教育現場だけでなく、子どもたちの生活する社会のここに彼らの魂が躍動する場が必要であり、そこへのアクセスしやすさが重要となる。既存の保育・教育システムと社会教育・地域との連携構築こそが、育ちと学びを下支えする「魂の躍動」をもたらす鍵を握って

いるといえる。今回調査したTours市の図書館におけるアニメーションの取り組みは、地域における社会教育の機会として大きな役割を果たしていた。

本研究では、子どもの育ちと学びの連続性に着目してフランスの事例を分析してきたが、アニメーションに参加する子どもたちの姿から、育ちと学びの相互作用についても再認識させられた。樹形図作りに参加した男児は、静かに作業に没頭していたが、彼の生育環境から学んだことを自分なりの工夫で作品に活かそうとしていた。その作品が家族に感動を与え、自分の存在を表現した樹形図を誇らしげに持って帰る姿が印象的であった。このアニメーションの前後で彼の表情が一段と大人びたように見えた。育ちと学びの相互作用は、アニメーションだけにとどまらず、保育・教育環境や内容を考えていく上で重要な視点として今後も注意していきたい。相互作用を横糸、連続性を縦糸とすると、子どもたちの育ちと学びは両者によって織りなされていくといえる。

子どもたちも生活の中で「ワクワク」しながら五感を駆使して活動し、その成長を私たち大人も「ワクワク」しながら見守るという、社会における保育・教育環境の整備についての意識を常に忘れないようにしたい。

今回フランスの社会教育現場で、日本の絵本や日本人の作品が高く評価され活用されていることは驚きであった。日本人の感じ方や表現の仕方は、外国でそのきめ細やかさや繊細さと器用さをもって質的に高く評価されていることが興味深い。私たち日本人は慣れてしまい気づかなくなっているのかもしれないが、フランスで新しい感性として「ワクワク」しながら取り入れられているのはどういう点なのか、今後の研究課題としたい。

本調査に協力して下さったトゥール市の中央図書館・フランソワ・ミッテラン図書館・リヴ デュ シェール図書館の皆様には謝意を表します。

付記：本研究は2013年度福山市立大学重点研究費助成（「保幼小が連携し幼児期の学びと小学校教育の円滑な接続を図るための接続期カリキュラムと指導法および教材の国際比較」（研究代表：大庭三枝）による成果の一部である。

<引用・参考文献>

AGEEM,2008,Guide à usage des parents

Anouck Boisrobert,2011,*Dans la forêt du paresseux*,
Hélium

Antonin Lorchard,2013,*Le crocolion*, éditions Thierry
Magnier

David Carter,2007,*600 pastilles noires*,Gallimard jeunesse

福井県教育委員会 2012「福井県幼児教育支援プログラム」
http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/gimu/youji_d/fil/102.pdf

福井県幼児教育支援センター2014「福井県保幼小接続カリ
キュラム(施行版)ー学びに向かう力をつなぐー」
http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/gimu/youjikyoku/youjikyoku_d/fil/200.pdf

子どもの権利・教育・文化全国センター 2010『ポケット版子
どもの権利ノート』2010年改訂版

Komagata katumi, 2010, *Little tree/petit arbre*, One
Stooke

厚生労働省編 2008『保育所保育指針解説書』フレーベル館

Marie Houblon,2011,*Quand tes grands-parents étaient
enfants*,Tourbillon

Marion Bataille,2008,*ABC 3d*,Albin Michel

Martin Bourre,1996,*J'aime la galette*, Didier jeunesse

Martin Bourre,2006,*La Licone*, l'école des loisirs

Mase Naotaka,2011,*Voilà le facteur !*, Seuil Jeunesse

増山均 2000『アニメーションが子どもを育てる』旬報社

増山均・齋藤史夫 2012『うばわないで！子ども時代』新日本
出版社

Mies van Hout,2011,*Aujourd'hui je suis...*,Minédition

Myriam Provence,Emmanuel de Boos,Jérôme Pecnard,
2006, *Les plus beaux Arbres généalogiques*, Editions
Les Arènes

文部科学省 2008a『幼稚園教育要領解説』

文部科学省 2008b『小学校学習指導要領解説総則編』

文部科学省 2008c『小学校学習指導要領解説生活編』

OMEP 日本委員会 2012『子どもたちの世界を豊かに』

大庭三枝 2010「フランスの保育学校課程における身体表現教
育に関する研究ー身体で語り表現する力を育てるー」福
山市立女子短期大学研究教育公開センター年報第7号；
69-74

大庭三枝 2011「フランスにおける表現教育の展開ー保育学校
課程から大切に育てる「感じて表現する力」ー」,『児童

教育学を創る』福山市立大学開学記念論集 ;163-183 児島
書店

大庭三枝 2014「フランスにおける子ども主体の『保育学校(L'
école maternelle)』」,『子どもの養育の社会化ーパラダ
イム・チェンジのためにー』111-147, お茶の水書房
村川雅弘・中山洋司・和田信行編著 2009『生活科 新たなる
ステージへ 平成20年告示新学習指導要領解説』日本文
教出版

Paul Rouillac,2011,*Masques*,Mango

Philippe UG,2011,*Drôled'oiseau*,éditions Les Grandes
Personnes

Philippe UG,2012,*Big bang pop*,éditions Les Grandes
Personnes

Philippe UG,2013,*Les robots qui n' aime pas l'
eau*,éditions Les Grandes Personnes

佐藤一子・増山均1995『子どもの文化権と文化的参加』第一
書林

清水益治・森敏昭編著 2013『0歳～12歳児の発達と学びー保
幼小の連携と接続に向けてー』北大路書房

鈴木幹雄・長谷川哲哉 2012『子どもの心に語りかける表現教
育』あいり出版

Ville de Tours,2014,*Programme des Bibliothèques
municipales JANVIER-FEVRIER* 2014

Wolf Erlbruch,2012,*La grand question*,éditions Thierry
Magnier

横浜市子ども青少年局・横浜市教育委員会 2012『育ちと学び
をつなぐー横浜版接続期カリキュラムー』

(2014年10月31日受稿, 2014年12月16日受理)